

保育者養成校における保育内容「健康」の授業検討： 視聴覚教材から学ぶ安全

A Study of Lessons on Childcare Content “Health” for Early Childhood Educators in Junior College: Safety Consciousness Learning from Audiovisual Teaching Materials

キーワード：保育実践、領域、リスク、ハザード

村石 理恵子

MURAISHI Rieko

土井 晶子

DOI Akiko

(昭和女子大学非常勤講師)

I 問題

子どもたちの体力・運動能力の低下が危惧され、『幼児期運動指針¹⁾』が提言されたが、特定の種目に特化した運動指導に留まったり、保育中の事故・ケガに対する警戒から過剰な安全対策に陥っているなど、子どもが主体的に運動することを妨げる不適切な傾向がある。土井・村石(2015)²⁾は、保育現場での運動遊びについての保育実践者の安全意識の実態を調査している。その結果、保育実践者は遊びの種類によって危険を判断し、特に子どもの動きが大きい固定遊具の遊びを危険と判断していることが明らかになった。また、村石・土井(2016)³⁾では、保育実践者が安全を判断する要因として、園の規則が大きくかわることがわかった。規則を守ることを徹底させることを重要と考えている保育実践者は、子どもにその規則を順守させることで遊びへの介入の必要性を感じない。安全を確保するための規則を伝えることは大切であるが、規則の範囲内の遊びしか体験させないのでは、子どものリスクへの挑戦や主体的な安全の学習は習得されないだろう。

一方、保育者養成校においては、学生が事故・ケガに対する不安から、実習の主活動の指導として選択するのは、室内における製作活動に偏る傾向が

みられる。保育現場において、「保育環境における安全と事故防止」は、現代的課題である。単に「危険だから」という理由で遊びを制限するのではなく、子どもが主体的な行動を通して安全な身の処し方や遊び方を身に着けるために、保育者養成校として、保育環境の安全性について、どのような授業プログラムを構築すべきかを検討する必要がある。筆者二人が、領域「健康」の保育内容についての授業で採用している教科書⁴⁾には、安全について学ぶ章がある。それに加え、視聴覚教材を活用することで、学生に対して子どもの姿から安全の判断を的確に行うことを促したいと考える。なお、保育環境の安全に関する視聴覚教材^{5) 6)}はあるが、それらのほとんどが保育現場におけると事故とその防止対策を示したものである。

II 目的と方法

1. 研究の目的

本研究の目的は、保育環境と結び付けたリスクとハザードの判断力を養成するために、学生の主体的な学修を支える授業方法を検討することである。具体的には、保育内容「健康」の授業で視聴覚教材を使用したプログラム実施し、その視聴覚教材の妥当性を検討する。

2. 安全の指導(リスクとハザード)

本研究におけるリスクとハザードに対する見解および定義は、次のとおり平成26年(2014)年に国土交通省が公表した「都市公園における遊具の安全確保に関する指針(改訂第2版)⁷⁾」の中で示したものに則っている。

子どもは、遊びを通して冒険や挑戦をし、心身の能力を高めていくものであり、それは遊びの価値のひとつであるが、冒険や挑戦には危険性も内在している。子どもの遊びにおける安全確保にあたっては、子どもの遊びに内在する危険性が遊びの価値のひとつでもあることから、事故の回避能力を育む危険性あるいは子どもが判断可能な危険性であるリスクと、事故につながる危険性あるいは子どもが判断不可能な危険性であるハザードとに区分するものとする。

(1) リスク

リスクは、遊びの楽しみの要素で冒険や挑戦の対象となり、子どもの発達にとって必要な危険性は遊びの価値のひとつである。子どもは小さなリスクへの対応を学ぶことで経験的に危険を予測し、事故を回避できるようになる。また、子どもが危険を予測し、どのように対処すれば良いか判断可能な危険性もリスクであり、子どもが危険を分かっていること、どのように対処すれば良いか判断可能な危険性もリスクであり、子どもが危険を分かっていること、リスクへの挑戦である。

(2) ハザード

ハザードは、遊びが持っている冒険や挑戦といった遊びの価値とは関係のないところで事故を発生させるおそれのある危険性である。また、子どもが予測できず、どのように対処すれば良いか判断不可能な危険性もハザードであり、子どもが危険を分からずに行うことは、リスクへの挑戦とはならない。

子どもが遊びを通して冒険や挑戦をすることは自然な行為である。また、子どもは、ある程度の危険性を内在している遊びに惹かれ、こうした遊びに挑戦することにより自己の心身の能力を高めてゆくものである。本研究においては、子どもの遊びの重要性を踏

まえ、子どもの「やりたい」という意欲を高めることを大切に、積極的に子どもの冒険や挑戦を見守る保育をしている保育園の映像を視聴覚教材として取り入れ、授業プログラムを実施する。

3. 視聴覚教材

テレビで放映された番組「ドキドキ・ヒヤリで子どもは育つ～遊具プロジェクトの挑戦～⁸⁾」を用いることとし、子どもの意志で挑戦する姿や、その姿をそっと保育実践者が見守っている映像を中心に、50分の番組を30分程度に編集したものを使用する。保育園児が、園庭にある少し難しい、チャレンジし甲斐のある遊具(3mの高さのところからスタートする空中ロープウェイや、2.5mの高さの石垣など)に自分の意志で挑戦する姿や、その姿をそっと保育実践者が見ている映像を中心に編集したものである。映像には次のような場面がある。



図1 空中ロープウェイに挑戦する様子

初めて空中ロープウェイに挑戦する5歳のTは、スタート台で躊躇してロープを握りしめたまま台に立ち続け、結局その日は空中ロープウェイの挑戦をあきらめる。その間、保育実践者はTの決断を待ち、スタートを促すような働きかけをしない。



図2 石垣登りに挑戦する様子

3歳のKは、自分の背丈の3倍ほどの高さの石垣登りに挑戦するが、登っている途中で滑り落ちてしまい悔しくて泣く。その様子を見ていた保育実践者は安全な滑り落ち方をしたことを認める。その後、Kは再度、石垣登りに挑戦する。保育実践者は、子どもが自らやり遂げようとする姿を見守り続ける。

4. 方法

1) 研究対象

保育者養成校で、筆者2名が担当している授業と、その授業を履修している学生である。

科目名：A校「保育内容（健康）指導法」

（演習、必修1単位、1年前期）

B校「保育内容指導法（健康）」

（講義、必修2単位、2年後期）

履修学生：A校 83名、B校63名

2) 授業実施日

A校：2015年6月2日、15日（1年次前期）

B校：2016年11月22日（2年次後期）

3) 手続き

テーマ「保育環境の安全性」の中で、次のような仮説を立て、「ドキドキ・ヒヤリで子どもは育つ（編集版30分）」の視聴覚教材を使用した授業を行う。

【仮説】

学生は、主体的にリスクに挑戦する子どもの姿や、保育実践者が子どもを信頼し、一人ひとりの実態に合わせた援助を行っている姿を見ることで、「保育環境と結び付けたリスクとハザード」について理解する。

視聴覚教材を観た後に、学生へ次のような質問紙調査（自由記述式）を行う。

【質問項目】

視聴覚教材「ドキドキ・ヒヤリで子どもは育つ」を観て、あなたは保育環境の安全性についてどのように考えますか。次の事項について答えましょう。

- ①子どもが冒険や挑戦をする姿だと思った場面はどこですか。（ドキドキ感じたことはなんですか。）
- ②危険であり回避させたいと思った部分はどこですか。（ヒヤリと感じたことはなんですか。）
- ③子どもたちがこのような挑戦や冒険ができるようになるためには、どのような保育者のかかわりが必要だと思いますか。
- ④あなたは今までの視聴覚教材を見て、リスクとハザードをどのように考えますか。

4) 分析

質問紙「保育環境の安全性」（自由記述）の問1から問3の項目については、IBM Text Analytics for Surveys³を用いて、カテゴリー情報を得るために、一次分析として、「キーワード」の抽出という作業を行い、「重要アイテム」である重要な内容や意味深い内容を拾い出す。二次分析で、一次分析で得られた「重要アイテム」と質問内容の背景等の要因から、カテゴリー化する。具体的には、問1および問2では、一次分析で得られた重要アイテムから、二次分析では「固定遊具」と「動き」の2種類のカテゴリー化を行う。また、問3では、一次分析で得られた重要アイテムと保育実践者のかかわりを考慮し、カテゴリー化を行う。

問4の項目は、前述したリスクとハザードに対する

見解および定義に基づき、次の4つの項目、「1) リスクとハザードの見解および定義の理解している」、「2) リスクの見解および定義を理解している」、「3) ハザードの見解および定義を理解している」、「4) リスクとハザードの見解および定義の理解していない(リスクとハザードについての記述がないものも含まれる)」に分類する。

5) 倫理的配慮

本研究の実施においては、学生への質問紙の依頼の際には、研究の趣旨説明等を行い、インフォームドコンセントで研究への同意の承諾してもらう。また、特定の学生のデータを取り扱うときは匿名化を図り、データ結果の集計・分析を行う。

III 結果と考察

質問紙調査「保育環境の安全性」の回答者は、A校75名、B校55名の計130名である。また、質問紙調査「保育環境の安全性」についての結果は次のとおりである。

1. 冒険や挑戦だと思ったこと

問1の回答結果は、次のとおりである。

表1 冒険や挑戦だと思ったこと

固定遊具別		動き別	
固定遊具名	人数 (割合)	動きの種類	人数 (割合)
空中ロープウェイ	71名 (54.6%)	登る	49名 (37.6%)
石垣登り	66名 (50.7%)	落ちる	28名 (21.5%)
ブランコ (含箱ブランコ)	7名 (5.3%)		

空中ロープウェイや石垣登りなどの高さのある遊具で遊ぶ子どもの姿について、冒険や挑戦する姿であり、ドキドキ感じたという学生が半数以上いた。また、動きの種類別にみると、空中ロープウェイや石垣登りなどに果敢に挑んで登っている姿という学生が約4割、石垣から何度ずり落ちても、チャレンジする姿と

いう学生が約2割いた。具体的には、次のような回答が挙げられている。

表2 問1 具体的な回答例

	具体的な回答例
1	空中ロープウェイや石垣登り。普段の生活ではなかなかできないような遊具で「やってみたくて怖い」と園児の表情から伝わってきたため。
2	木に登っている場面。空中ロープウェイに挑戦する姿。自分のやったことのないこと、怖さを感じながらもやってみたくてという思いで挑戦していたから。子どもの顔がキラキラしていたから。
3	空中ロープウェイをやろうと何度も縄にジャンプをしていてチャレンジ(空中ロープウェイ)しているところ。挑戦したい遊具を見ている時。できなくて泣いているところ(葛藤)。
4	Tちゃんが空中ロープウェイを成功させるか否かの時がドキドキした。3歳の女の子が3回目以降に頑張って石垣に登る時。子どもが挑戦している時にドキドキした。

2. 危険であり回避させたいと思ったこと

問2の回答結果は、次のとおりである。

表3 危険であり回避させたいと思ったこと

固定遊具別		動き別	
固定遊具名	人数 (割合)	動きの種類	人数 (割合)
石垣登り	38名 (29.2%)	落ちる	57名 (43.8%)
空中ロープウェイ	29名 (22.3%)	登る	28名 (21.5%)
回転遊具(迴旋塔、 ジャングルグローブ等)	13名 (10.0%)	降りる	7名 (5.3%)
シーソー	8名 (6.1%)	挟む	6名 (4.6%)
ブランコ (含箱ブランコ)	7名 (5.3%)		

石垣登りや空中ロープウェイなどの高さのある遊具から、「落ちる」ことでケガをしないか、ヒヤリとし、回避させたいと感じた学生が3割近くいた。また、回転遊具の劣化やシーソーの隙間に指を挟むなどの事故にヒヤリと感じたという学生が1割いた。具体的には、次のような回答が挙げられている。

表4 問2 具体的な回答例

	具体的な回答例
1	大人も届かない高い所に子どもがいる時。落ちたら危ないから。
2	公園にあり、鉄等でできた重い遊具。
3	回転遊具(ジャングルグローブ)が30年くらい経って、もろくて遊んでいる時に壊れた。
4	回転遊具(回旋塔)に飛び乗ろうとする子ども。シーソーの金具に指を挟まないか。

質問1と2を比較すると、石垣登りや空中ロープウェイなど高いところから落ちてケガをしないかと心配している学生もいたが、回避させたいと考えた学生より冒険や挑戦と考えた学生が多かった。

3. 保育者のかかわり

問3の回答結果は、次のとおりである。

表5 保育者のかかわり

保育者のかかわり	人数(割合)
見守る	86名(66.1%)
声掛け	64名(49.2%)
環境設定	42名(32.3%)
手助け	10名(10.0%)
その他	2名(1.5%)

具体的には、次のような回答が挙げられている。

表6 問3 具体的な回答例

	具体的な回答例
1	何でもかんでも危険だと判断するのではなく、自分でできることはやらせてみる。たくさん冒険するためには、たくさんを知る必要がある。(例、外でたくさん遊ぶ) 遠い所から見守っていて、万が一、子どもがケガをしたら、すぐ行けるように見守っていることが大事。
2	まず遊具を見て、しっかり管理できているかどうかを確かめる。遠い所から見守っていて、万が一、子どもがケガしたら、すぐに行けるように準備しておく。子どもが無理だと思えるような遊びを強引に「できるから大丈夫!」と言わないこと。(子ども自身の力で色んなことにチャレンジしたりすることが大事だから。)
3	すぐに助けの手を出さず見守ることも必要であること。失敗してしまっても、それまでの動きを褒めてあげるような声掛け。点検を怠らず、事故を未然に防ぐような心掛け。
4	無理にやらせようとしめない。自分から進んでやりたいと言ったことに手を出さず危ないと思った時に手を差しのべる。思い切って遊べる、挑戦できるような環境を作る。

保育者のかかわりとして、「見守る」を挙げた学生が6割以上いる。「見守る」の中には、近くで見守る、口を出さずに見守る、少し距離をおいて見守る、といったようにニュアンスに幅があった。そして、積極的に手を出して挑戦を達成させる援助は少ない。冒険や挑戦に対応するかかわりは、「見守る」ことが必要であると判断している。「声掛け」については、取り組む意欲を高めるため、やり方についてのアドバイスのため、出来たことをほめるため、といったことを目的に行う「声掛け」が挙げられている。「環境設定」は、安全確保、点検、自分の力で制御できる遊具作りといったことが多く挙げられた。

学生にとって、保育者のかかわりという保育者は教えることが援助の中心と考えやすい。しかし、実際は環境を用意し、整えることが重要で、子どもがいない時間帯での準備や整備を行っているからこそ、子どもを迎え入れることが可能になる。質問3で、子どもに直接声かける等の働きかけよりも「見守る」ことが最も多かったことや、(一見)間接的な働きかけといえる環境設定が多く挙げられたのは、教材とした映像でK保育園の保育実践者がいかに根気強く見守り、地道に環境を整えているかを視聴して、把握できたことが大きく影響している。

4. リスクとハザードについて考えること

前述したリスクとハザードに対する見解および定義に基づき、次の4つの項目、「1) リスクとハザードの見解および定義の理解している」、「2) リスクの見解および定義を理解している」、「3) ハザードの見解および定義を理解している」、「4) リスクおよびハザードの見解/定義の理解していない(リスクとハザードについて、いずれの記述もないものも含まれる)」に分類する。

表7 リスクとハザードの理解

見解/定義の理解	人数(割合)
1) リスクおよびハザード	55名(42.3%)
2) リスクのみ	37名(28.4%)
3) ハザードのみ	3名(2.3%)
4) その他	35名(26.9%)

具体的には、次のような回答が挙げられている。

表8 問4 具体的な回答例

	具体的な回答例
1	子どもが挑戦しようと思ってチャレンジする上で多少のケガはリスクだと思う。空中ロープウェイがから飛び降りる時、地面の衝撃を抑えるために軟らかくしているからこそリスクに留まっていると思った。意識しない外からの力でケガをする。遊具が壊れたといった子どもの力でどうにもできないことがハザードになってしまうと思う。
2	子どもたちにとって、危険というものは、ある程度分かっている、それも遊びの中などで学んでいくことだから、保育者が何でもやってあげてしまうのではなく、子どもが挑戦したくなるような環境設定や保育者の対応が必要となってくる。すべての危険を取り除くのではなく、子どもの成長などを考慮していくのが大事。
3	ハザードの要素には十分に注意して、リスクは子どもが成長する大切な要素だからなくさないで、挑戦させる機会を与えることがよいと思う。
4	毎日遊んでいる遊具だと何をしたら危険だからやめようと制御しながら遊べるし、ある程度スリルを味わいながらリスクを体験できる。遊具が老朽化して倒れる問題はハザードだと考えてよいと思う。

以上、質問1～4に対する学生の回答の分析結果から、学生は子どもの遊びと安全について、次のことを理解したと考える。

- 1) 遊びの中にはリスクが含まれていて、子どもはチャレンジすることで「危険な状況」を学習し、自らの経験として蓄積し、重大な危険を回避する能力を育てている。
- 2) 一見危険な遊びと映ることも、子どもには意味のあるチャレンジであり、保育実践者が危険な状況に対応できるように見守ることが大切である。
- 3) 子どもには判断できず重大な事故につながるハザードは保育実践者が取り除く必要があり、保育環境の整備が重要である。

子どもは、遊びを通して様々な体験をし、成長していく。同様に危険な状況を判断する能力は、ドキドキ感やヒヤリとした体験、転倒やケガをした経験などを重ねて習得される。リスクを取り除き、子どもに全くケガをさせないことが保育実践者の役割でなく、環境を整備して重大事故を無くし、いかに軽いケガに留めるか、一人ひとりの実態に合わせた援助を

することが必要なのである。

本研究では、子どもがチャレンジし甲斐のある遊びに自らの意志で挑戦する視聴覚教材を用いた授業を通して、学生の安全意識を育むことができたと考える。つまり、「保育環境の安全性」について学ぶ、保育内容「健康」の授業には、子ども自身が主体的にリスクを学ぶ姿を理解する内容を取り入れることが有効であるといえる。

IV 課題

幼児期運動指針に基づいて制作された「幼児期の運動に関する指導参考資料 第一集」⁸⁾「幼児期の運動に関する指導参考資料 第二集」⁹⁾のDVD資料は、幼児が多様な動きを体験するような遊びの事例が多く紹介されている。第一集の一部分には、「体を動かす遊びの中の事故事例と対策」が提示されている。その場面では、すべり台やブランコ等での事故事例がCGで表され、事故防止のために、保育施設が行うハザード対策や子どもへの指導として「遊びのルールを教える」こと等が示されている。このDVD資料は、全国の幼稚園、保育所等に配布されたが、保育者養成校には配布されていない。保育現場の研修の実践を踏まえ、養成校の学生には、子どもが進んで体を動かすように積極的に支援することと子どもの育ちを理解して支える学びが必要である。リスクとハザードを理解し、子ども自身が主体的にリスクを学ぶ姿を理解する内容を、授業で取り上げることが重要であり、単純に園の規則を守ることで安全が確保されると思えない、一人一人の子どもの育ちを支える保育実践者を養成することにつながると思う。今後は、今回の視聴覚教材の活用を含めた、保育内容「健康」の授業全体のプログラムについて検討していきたい。

引用文献

- 1) 幼児期運動指針策定委員会 (2012)『幼児期運動指針』文部科学省
- 2) 土井晶子・村石理恵子 (2015)「運動遊びに関する安全意識～保育実践者の視座より～」全国

保育士養成協議会第54回研究大会

- 3) 村石理恵子・土井晶子(2016)「保育実践者の戸外遊びにおける安全の判断～すべり台の視点から～」日本保育学会第69回大会
- 4) 河邊 貴子 編著(2012)『演習保育内容 健康』建帛社
- 5) 萩須隆雄(監修)(2004)「事故の発生要因とその対策」新宿スタジオ発行
- 6) 萩須隆雄(監修)(2004)「実践における事故防止のポイント」新宿スタジオ発行
- 7) 国土交通省都市局公園緑地・景観課(2014)「2. 子どもの遊びにおける危険性と事故」『都市公園における遊具の安全確保に関する指針(改訂第2版)』国土交通省
- 8) NHK総合テレビ「ドキドキ・ヒヤリで子どもは育つ～遊具プロジェクトの挑戦～」2007年2月18日放送
- 9) 平成26年度幼児期の運動に関する指導参考資料作成委員会(2015)「幼児期の運動に関する指導参考資料 第一集」文部科学省
- 10) 平成27年度幼児期の運動に関する指導参考資料作成委員会(2016)「幼児期の運動に関する指導参考資料 第二集」スポーツ庁